

公開授業科目： 「理系の戦略と社会貢献—地球科学の観点から」（教養発展科目）
授業担当教員： 鎌田 浩毅 京都大学教授（非常勤講師）
開講日時・場所： 平成20年8月6日（水）4、5限、A講義室

授業について

夏休み中に行われた集中講義、京都大学鎌田浩毅教授の「理系の戦略と社会貢献—地球科学の観点から」を公開授業とし、「教養とは何か」という主題を軸に、授業を通して教員、学生を含めた教養に関する議論を行った。授業は前の授業時間の終わりに学生から提出された授業内容またはそれに関連する内容に対する学生の意見や感想を記したメモの紹介から始まり、それぞれのメモに鎌田教授が答えながら、授業主題へ誘導する方法で進められた。途中で授業に参加した教員の意見を求め、時には教員と歓談し、時には教員と議論を戦わせ、学生の意見も求めた。また鎌田教授自身が出演したテレビ番組の一部を映写し、番組中での討論内容を授業に取り上げ、裏話を紹介したり、授業に関係しない話を合間に加えたりしながら、学生の気を引きつけて授業をまとめていった。学生の発言が少ないかのように見える場面もあったが、学生の意見が常に質問紙を通してフィードバックされているからである。鎌田教授は学生との相互作用の中で、講義を進めていった。

鎌田教授からは教養の基本は本と旅行であること、本は文房具であって、書き込みしてよく、最後まで読まなくてもよいから多くの本を読むことが提案された。岩波新書は一冊読めばその分野の基礎は学べるとの発言もあった。人間は多くのことはできないから、片手間で教養は教えられないため、現在は論文よりも新書を執筆することを重視しているとのことであった。出席した本学教員からは、「教養では浅く、広い領域を学ぶことが重要である」、「専門基礎と教養は同様には扱えない」、「大学教員にはインパクトファクタや論文作成が大切である」などの意見が出た。

さらに教養とは地道な積み重ねであって、大企業の社長には教養のない人はいないことや人間力のあるすてきな人となるためには面白くてためになる専門以外の話題が必要であることを挙げ、自分が友人、恋人、結婚相手や上司として望ましいと思う人は本人が教養のある人だと考えている人たちであるとの発言があった。鎌田教授ご自身の経歴と経験を述べ、教養のある先生や上司の姿を見て、そのような人になりたいと思って努力してきたことや、哲学者バートランド・ラッセルの『西洋哲学史』、孔子の「下学上達」、大学中庸の「素行自得」等のキーワードを挙げ、クラシックに学ぶことの重要性を挙げ、「Give and take」ではなく、「Give and give」の心がけが教養を教えるためには必要であると述べられた。また、鎌田教授の今年のモットーは、「Noblesse Oblige」（高い身分に伴う義務）であることを公表した。この言葉は、鎌田教授が教壇や新書執筆などにおける教養教育を通して行っている社会貢献を表している。その上で、ご自身の教養教育を通して「学生が社会に出てから望ましいところに就職できれば、自分の使命は果たせたことになる」と締めくくった。

報告書作成者：物質・材料系 前川博史、教育開発系 高橋綾子